ひとつの境内に68番札所「神恵院」と69番札所「観音寺」のふたつの寺が同居している珍しい札所。仁王門の右の柱には「四国六十八、六十九番札霊場」と書かれ、左の柱には「七宝山神恵院、観音寺」と書かれている。

68 番 69 番共通の山門　境内の案内表示

納経所も同じ場所にある。本堂は平成15年に完成したモダンな建物。本堂の横に「巍巍園」という日本庭園があり、ツツジの名所として有名だそうだ。

境内からさらに上がると琴弾公園の展望台がある。展望台からは松林の砂浜にやたら大きな直径約100mもある寛永通法の銭形の砂絵が見える。

１６時５０分には、すぐ横の**６９番（観音寺）**に行き、お参りをする。（１６時５５分～１７時１５分）

道中のめいじはしを渡る　69 番（観音寺）

このお寺の住所を見ると分かるように、市名に観音寺がついていることから、地元では「おかんおんさん」と呼ばれ、古くから親しまれているお寺。歴史が感じられる本堂は国の重要文化財。

宝物館には、74cmの釈迦涅槃像、琴弾八幡宮縁起など、多くの重要文化財が保存されているそうです。鐘楼の柱にある雲と波の彫り物もディテールが細かくて、非常に素晴らしかった。

本日の予定が全て終わり、バスで17時18分に帰路岡山へさぬき豊中ICに上り早島インターで下り倉敷を経由して、我が家には20時45分に到着する。

気分良好で疲れ特になし。感謝！有り難う！

なお、本日の歩数は３７．７３９歩でした。

第４８回

平成24年7月2日（月）　讃岐平野を進み弥谷寺へ上がる（観音寺～出釈迦寺）

歩き（ウオーキング）遍路　　札所3ヵ所

約22km

７０番（七宝山）本山寺「もとやまじ」

所在地＝香川県三豊市豊中町本山甲1445

電　話＝0875－62－2007

本尊＝馬頭観音
開基＝弘法大師
宗派＝高野山真言宗

○本堂は、平城天皇の勅願により弘法大師が一夜のうちに建立したと言われている。本尊も大師みずからが刻んだもの。馬頭観音をまつっているのは、四国霊場では唯一。本堂の中にある仏壇、厨子などは国宝。

◎馬頭観音について

宝冠に馬頭をいただき憤怒の表情をもつ観音菩薩で、かって交通の手段として大事にされた馬の守り神であった。

７１番（剣五山）弥谷寺「いやだにじ」

所在地＝香川県三豊市三野町大見乙70

電　話＝0875－72－3446

本尊＝千手観音菩薩
開基＝行基
宗派＝真言宗善通寺派

○３００段近い石段を上っていくと大師堂につくという、相当な難所といえる。弘法大師が幼少の頃に修行した場所で、弥谷山の岩という岩

に弘法大師がたくさんの仏を刻んだといわれている。「磨崖仏」もその一つとか。

◎千手観音菩薩について

千手千眼観自在菩薩というのが正式な名前で、それぞれの手に眼をもつ。さまざまな持ち物を手にして世界の衆生を救済する。

７３番（我拝師山）出釈迦寺（しゅっしゃかじ）

所在地＝香川県善通寺市吉原町１０９１
電　話＝０８７７－６３－００７３

本尊＝釈迦如来
開基＝弘法大師
宗派＝真言宗御室派

○弘法大師は、みずからが７歳の時に身投げした捨身ヶ嶽から少し下がったところにお堂を建て、出釈迦寺と名づけた。境内を入り、正面に本堂、その右手に大師堂、左手の小高いところに虚空蔵堂が並んでいる。

◎釈迦如来について

仏教の開祖で釈迦族の聖者という意味から釈迦牟尼とも呼ばれる。誕生してすぐに七歩をあるき天地を指したと伝わる。

筆者紀行

山幸発７時０８分のバスに乗り、倉敷を経由して参加者３８名と吉本先達、スタッフ等４名の合計４２名で瀬戸中央道に上りさぬき豊中ＩＣで下りて、前回歩き終えた観音寺に９時１０分に到着する。

70 番（本山寺）国宝　重要文化財の仁王門

準備を済ませ９時１５分から歩き始めてから、約１時間で**７０番（本山寺）**に着く、みんな大きな声で読経しお願い事を含めてお参りする。

１０時５０にバスにて観音寺の近くの観音寺グランドホテルまで行き昼食をする。再度バスにて本山寺まで帰る。

本山寺境内の五重の塔　本山寺内の古い石塔

１１時５５分から歩き始める。次の７１番（弥谷寺）は標高４００ｍほどの弥谷山に札所があり、急な上り下りや多数の階段等で難所であり、ひと汗もふた汗もかく参拝であるが、霊気の漂う雰囲気に包まれ、身の引き締まる思いがする。大変に疲れ苦労しました。

木々が覆い茂り日差しが届かない。日中でも薄暗い石段が境内まで４００段近く、本堂へはさらに１５０段以上続く。仁王門の手前の階段を含めると弥谷寺には、約５５０段近くの石段を上がることになる。

途中の階段をのぼった所に金剛拳大菩薩像という６ｍもの大きな菩薩像があり、またそこから赤色の手すりの１０８階段があり、上がる事で煩悩をなくせと言われている様に感じた。

71 番（弥谷寺）　　弥谷寺本堂の位置

休憩を含めて約３時間３０間くらい要して漸くにして、**７１番（弥谷寺）**には１５時２６分に到着する。

気持ちを鎮めて心を込めてお参りをする。大師堂は岩にはめ込まれたように建てられていて、靴を脱いで上がる様になっている。

納経所もここにある。大師堂の奥ノ院は「獅子岩屈」と呼ばれ、弘法大師が７～１３歳まで勉強した場所だと言われており、そこには４２歳の厄年の大師像と、阿弥陀如来（大師の父）と弥勒菩薩（大師の母）が祀られていた。

阿弥陀三尊の磨崖仏

磨崖仏近く大師像

本堂も岩壁にはめ込まれるように建っていた。本堂右手の岩には阿弥陀三尊の磨崖仏が刻まれている。そして大師が求聞持法を習得したと伝えられる求聞持窟や枯れることがない湧き水の出る水場もある。

見どころは多いお寺なのだが、階段が多すぎて辛かったし、大変に苦労したが達成感あり。

１５時５０分に次にと歩き始め**７３番（出釈迦寺）**に１７時０５分に到着する。

73 番近くの古い石柱

73 番（出釈迦寺）

全員で気持ちを込めて、心を一つにして大きな声でお参りをする。

大師が幼少のころの伝説として、７歳の弘法大師は倭斬濃山（今の我拝師山）にのぼり、「仏門に入り、多くの人を救おうとする願いが叶うなら霊験を、さもなければこの身を諸仏に供養する」と祈って断崖絶壁から身を投げたという。

すると釈迦如来と羽衣をまとった天女が現れ、幼い弘法大師は天女に抱きとめられて、大師は命を助けられ、大願成就を約束されたという。

大師堂の左手の石段を少しのぼったところに、その捨身ヶ嶽禅定を見ることができる「捨身ヶ嶽遥拝所」がある。ここで念仏を唱えれば、捨身ヶ嶽禅定に参詣するのと同じように、ご利益が得られるそうだ。

実際に捨身ヶ嶽禅定に行くには、標高７８１ｍの険しい山を登らなければいけないので、今回は中止としました。

なお、道順の関係で先に７３番にお参りをしましたので、７２番札所（曼荼羅寺）には、次回に行きます。

本日の予定が全て終わり、１７時４０分にバスに乗り岡山へ、善通寺ＩＣに上がり、瀬戸中央道の早島インターで下り倉敷を経由して、我が家には２０時５０分に無事に帰宅する。

足腰は痛く大変に疲れたが、気分は爽快です。家族に感謝！身体に感謝！　有り難う！

なお、本日の歩数は３６．５０７歩でした。

次号に続く　　お楽しみに（編者）

古（いにしえ）の散策をエッセーで紹介

会員　山崎泰二

1.一歩と半歩の違いに時代を感じる

1).正確な歩測・・・伊能図

私たちは日常に「一歩」とか「半歩」とよく使う。最近の常識的な使い方と正式な使い方には少し差があるようだ。江戸末期正確な日本地図＝伊能図を完成させた伊能忠敬は上総国（今の千葉県）に生まれ佐原の庄屋に養子入りし、商家として再興し49歳で隠居後、第二の人生を幕府の天文方で学んだ。当初は私財でもって東北方面の測量を始めたが、時恰も幕末の外敵来襲の機運の時勢、幕府は正式に天文方に任命し 17 年の歳月を掛けて測量し精巧な日本地図を完成させた。

日本の沿岸に接近したイギリス艦隊は海上から測量しある程度の把握をしていたが、この伊能図を見て他のアジアの国とのレベル差に驚嘆敬服し実物を本国に持ち帰った。現在英国海事博物館に保管されているが。平成 10 年に伊能ウォーク（平成 11･12 年）開催に先立って日本に帰国展示された。実物は北海道がややずれているが殆ど一致する。素人が見ても驚嘆のかぎりである。

私は朝日新聞などが企画したこのウォークに部分的に何度か参加したこともあり千葉佐原の旧宅の訪問を思い立った。同友会の東京大会に妻と共に参加し、旧友の福井氏が千葉支社長をしていることもあって二家族で佐倉の国立博物館などを見学しその後足を伸ばした。旧宅は庄屋だけあって広い中庭に面していくつもの屋敷や蔵が連なっていたが、江戸に繋がる運河に面して物資の集積が盛んであったことを窺わせる。ここも当時のままを公開しているが、少し離れたところに近代風の博物館が平成 9 年に開館していてそちらも見物する。

前置きが長くなったが、彼の測量は**「正確な歩測」**であった。簡単な測量器具を携帯し主な道筋や脇道を一隊が歩け歩けの歩数があの正確な地図を完成させた。幕府での命令で最小限の応対はあったとしても宿では夜半まで記録に残す。充実した第二の人生で今でもその生き方に共鳴するものは多い。

2).岡大新納泉教授・・・造山古墳測量の話

山陽新聞のカルチャーで特別講座があり、丁度岡大の考古学研究室が造山古墳（全国 4 位の規模）表面の調査をGPSなどの最新機器での測量が一段落したタイミングでの講座となり、在野の仲間が多く聴講していた。佐藤先輩や野崎さんたち常連が揃っていて何かの話の中で昔の歩測が話題になり、参加者から歩測の数値が実際に合わないと指摘され、先生も困惑の様子であった。そこで私が伊能忠敬の話をして当時の一歩は「左右の歩幅」であることを説明し一件落着となった。常識が大きく変わってきている現実に講座を受講している知識人も納得した次第である。

3).万歩計は半歩計

最近では健康増進のためのウォークが盛んで私も万歩計を装着して一喜一憂している。この万歩計は振動をキャッチしているので一つの動きを一回と計測する。最近は携帯電話の機能にGPSや万歩計の機能もついているようで初老の私には文明の利器について行けない。その上この万歩計の一歩が実際には片方の歩幅であり正確には半歩計と称すべきである。片方の歩幅を一歩と捉え両方で二歩と主張する輩（やから）には、「では半歩は？」と聞き返すと「片方の半分かな？・・・」とあやふやになる。

正式な一歩半歩の考え方が万歩計の製造業者の初歩的なミステイクで大の大人や大学の先生まで迷わしている。時代の流れの変遷に恐ろしさを感じる。万歩計は半歩計と声を大きく叫びた

い心境だ。

4).昔の単位は人間の体が基準

今はメートル法に統一されているがそれでも身近な身の回りには別の表現の仕方が生き残っている。私が小学校に入りメートル法を学んで帰っても家族は尺貫法で、肉は斤(きん)田畑は一反一町で表し住宅は一間二間と数え、金槌(かなつち)の柄(え)は一尺が一番使い易い。一尺は大人の腕の長さであり畳は一畳三尺で大人が床について眠る時の最小スペースから来ていると先人から教わった。現在の建築基準法でも超高層は高さ 30m(11階)と定められている。30mは 100尺から来ていて。100 尺は人間のコントロール出来る限界と考えられたのであろう。消防の梯子車も最大長がこの100尺の考えに基づいている。細いロープの長さは尋(ひろ)で表わす。小船に乗って糸をたらす時、両腕を伸ばして海の深さを測量する。自分の身長と同じなのに驚く。生活の実態に合わせた知恵なのです。

お米の単位は一俵で表わします。一俵は重さにすると約 60kgです。メートル法の時代になったのですから、半端な数字ではなく50kgとか100kgの方がよさそうですがそれでは意味が薄れます。元々成人した男子は米一俵を担ぎ上げて一人前と認められたのです。体格も成人男子は米一俵約 60kgと一致します。最近知ったことですが江戸時代大人一年分の食糧が米一俵でした。計算すると毎日三食お米を食べていたことにはならないようです。雑穀などの粗食で補食していたのでしょう。昔の人は自分が一年間食べるお米を担げるようになって一人前として扱ってもらえていた。今の若いものの生活体験からは想像も出来ませんがそのほかにも、体の一部を単位にしたり表現したりすることが散見できます。

2.セキレイ(鶺鴒)は 古(いにしえ) よりの身近な仲間

<子孫繁栄の願いを込めて>

私の住む操明学区の仲間とグランドゴルフ等をしていると、人馴れした小型の鳥が飛んできて長めの尾を振りながら近づいて来る。スズメよりは少し大きいが白黒の羽がはっきりしていて、日本各地で我々と同じように年中居る留鳥(とめどり)で、名をセキレイ(鶺鴒)と称します。今回の主人公である。我々の仲間もこの鳥の存在は知っていても、鳥の名前を知らない人が多い。

私の知っているセキレイはセグロ(背黒)セキレイで、平地の水辺に住んでいる。白地の体に背中が黒いことからその名が付いたと思われる。海辺やその近辺ではハク(白)セキレイが多くは小さな群れをなして飛んでいる。セグロセキレイよりは白味の多い鳥である。慣れないと区別が付きにくい。山郷に入り小川の周辺ではキ(黄)セキレイに会う。華やかな色合いは自然に馴染んで美しい。時に集落で見かけることもあるが、多くは渓谷の川沿で飛ぶ虫を餌にしている。これらの三種類のセキレイは先に述べたように、少し長めの尾を縦(上下)に振りながら、ヨチヨチ歩き近寄って来る。私は見たことが無いが、イワ(岩)セキレイと称する種類は、尾を横に振るそうだ。名の通りキセキレイと同じく渓谷を棲家にしているのだろう。餌はすべて小さな飛ぶ虫らしい。

セグロセキレイ(鶺鴒)の雄姿

これらセキレイの大きな特徴は、成長すると番(つがい)になり、一生をペアーで過ごす。そして

何時も二羽が飛び交っている。逆に一羽のセキレイはまだ若く独身と言うことになる。単独で飛んでいるセキレイに「早く相方を見つけてね」と私は声掛けをしてしまう。

仲良し夫婦は鳩も同じで、鳩はその性質と飛ぶ距離の長さや早さが中でも帰巣本能があり伝書鳩として活躍している。特に先の大戦の折には、前線の最先端から通信の手段として、軍や新聞社で飼育利用された。戦後はマニアによる競技へと転進していて、わたしも高校生の頃友達に誘われて飼育していたことがある。話はそれたがセキレイ(鶺鴒)も夫婦仲良しであることを知る人は少ない。

私が小学生の頃に父が入院し見舞いに行った病室の庭先で、幼いセキレイが蹲(うずくま)っているのを発見し、室内に取り込んで手の上で撫でて可愛がっていると、傍から父が「野鳥は人の手に触れさせてはいけない」「どんなに可愛くても触ってはいけないよ」「幼鳥がこれから生きていくためには、人は近づかない方が好いのだ。離れた所から見てやりなさい」と教えてくれた。庭の外に枯葉を集めそっとしていると、いつの間にか親らしい鳥が来て、暫らくすると離れて行った。特に病身の父からのこの言葉は、数少ない触れ合いの思い出の一つである。

歴史好きの仲間で、長崎五島列島に伝わる記紀を学ぶ「ドンザの会」で、主に古事記を輪読しながら読み進んでいる中に、イザナギ・イザナミの命(みこと)が国造りをする有名な一節がある。この二神から最初に生まれたのはどうも失敗と知り、そこで鶺鴒が男女交合の道を教えたとの説話を知ることになる。ここではセキレイのことを「にわ くなぶり＝鶺鴒」として登場する。『にわ くなぶり有りて 首(かしら)揺(うごか)す 二神(イザナギ・イザナミ) 見(みそわ)して 交(とつぎ)の道を得つ・・・・・』(原文は当然漢文調)とあり、どうも古(いにしえ)の先人も、セキレイ夫婦が仲良し鳥であることを知って居り、特に番(つがい)で仲良く長い尾を振るさまが、求愛の仕種に似ていて、色っぽく少々エッチなことを連想させたのでしょう。別名＝とつぎおしえどり(嫁教鳥)など

そんな話を歴史系ウオークの途中で交わしていたら、「そう言えば婚礼の式に『鶺鴒台』なる床飾りが縁起の良いものとして飾られている。鶺鴒台の意味がそれに由来しているのですか」と聴かれて、我が意を得たことがあった。

鶺鴒台の一例

商品としてセットになっている

新しい夫婦の初めての根固めに寝所に雌雄の鶺鴒の番(つがい)を飾り子宝を願った風習を知る人も少なくなった。

この項を纏めていたら、気になることを思い出し、書架の中から西鶴の「好色一代男」を取り出してみると、冒頭に矢張り記載されていた。
『鶺鴒のふるまいを見て ようやく男女交合のことを悟った故事』と出てきた。元禄(1688～1704)の世で庶民の間で広く知られていたことも頷ける。

古事記等に出てくる鳥には、雉(キジ)や鵜(ウ)などが有名だが、このセキレイなるスズメ科の留鳥は我々の身近に共に棲息している。この環境をいつまでも残したいものである。

古(いにしえ)人からまた一つ学びました。

3.縄文人と弥生人の関りを

記紀に見る <猿田彦のこと>

私は予(かね)てから、約2500年の昔に中国の江南(呉の時代)地方から水耕稲作の技術を携えて日本列島に渡来し、先住民である縄文人と「和合」し新しく、弥生人の社会ができて今日があると信じて来た。残念ながら素人の浅ましさで、それを立証することが出来ないでいた。そんな矢先に歴史研究会が発行している「歴史研究」なる冊子が届いた。その中に三重県鈴鹿の会員で小林伊佐夫氏の論文「私説 猿田彦の正体」が目に止まり合点した次第である。

記紀による神話の世界に出てくる、猿田彦のことは一般に良く知られている。道先案内の神として身近な存在である。高天ノ原から葦原の瑞穂の国(当時の日本列島)に、ニニギノミコトら一行が降臨した時に、地元の国神(くにつかみ)の猿田彦が案内した件(くだり)の説話である。当時(縄文晩期)の日本列島には、豊かな森に木が茂り、清らかな水が小川に流れ、果樹の実も豊富で、川の浅瀬では魚も捕れたし葦原が拡がって、先住民(縄文人)が住んでいた。そんな光景が瞼に浮かぶ。そこに天神(あまつかみ)が渡来して来て日本国を統治することになる。

先住民も穀物の中でも稲=米の美味しさを知っていて、陸稲を栽培し焼畑を続けながら移動していた。稲の欠点である連作障害を乗り越えるためには、焼畑で移動しながらの耕作であった。そこに水耕稲作技術を持った渡来人は、故郷の中国江南地方に比べ、より管理のしやすい豊富な小川が随所にある日本列島に定住して稲作を始めた。質・量とも先住民の陸稲とは比較にならない。遠くで見ていた縄文人は、戦って排斥するのではなく「和合」の道を選び、お互いの長所・技術・経験を生かした「共生」が始まった。と私は推論している。

和合の証拠が古事記に猿田彦として登場していたのだ。縄文人の末裔であるアイヌの人々が使っていることばを研究し精査された、小林伊佐夫氏は概ね次のように説明されている。

「猿田彦の猿(サル)はアイヌ語で葦原を意味し、田(タ)はある(有る・在る)を意味する。彦はオトコ(男)の意味で、芦原に住む人達」

との明快な解説である。さすれば国神が天神を案内したとする古事記の編纂者は、当時から約1000 年も昔のことを、猿田彦との逸話として我々に残してくれたことになる。

全国歴史研究会の仲間の研究成果で、私の推論がまた一つ確証された。新しい学びを得た「歴史研究」の冊子であった。

弥生末期 岡山の百間川遺跡では田植えをし弥生人の足跡も残っていた 山崎撮影

4.吉備の主基田（すきでん）紀行

私の友人で郷土史家の井上秀男氏は父親の代から親子共通の趣味を持っていて、相当量の古書を蒐集保存され、その中から適宜解説的な小論を発表し続けている。たまたま日本先史古代研究会の“きび考”6 号の寄稿文のテーマが大嘗祭の記録を残した和本（写本）から江戸時代の第 115 代桜町天皇（在位 1735～1747）の大嘗会（だいじょうえ）の手順などを細かく記録したものからの採取であった。

本人に吉備中央町の主基田伝承地で村興しをしている活動について問うと、未だ探訪して居ないので是非訪問し調査したいとの事であった。私も他人を連れて行けるほど詳しくも無いので、この方面の先達であり、お互いの旧知の仲である野崎豊さんに早速お願いした。野崎氏の都合で平日に決めると、それなりの仲間が集まって来た。

私は文化財保護の立場で平成 13 年に東豊野神社の建物の調査をするために、当時の宮司である田村瑞神氏の案内で近辺を一巡したことがあり、『北屋の森』と表題の付いた冊子を借用してコピーさせて戴いた資料も手元に残っていた。当地に伝わる「ゆりわ田」（注）が主基田の跡であり、戦後の農地解放で神社の神田（地区住民の入会地）であったのを強制的に、民有地となり課税の対象になった。（全国一斉に行われ、戦後の食糧増産に資した斬新な政策との評価が定説）昭和 22 年のことである。

神社仏閣に詳しい野崎氏にはそれなりのフアンが居て総勢 7 名で、丁度今年の梅雨明けの宣言された蒸し暑い一日を、喧騒の市街地から濃い緑の森が車窓を流れて進む。岡山空港の横を通る吉備新線は高速道路並みの高規格道路で計画の半分の出来でも快適な道路だ。吉備高原都市と命名された正に人工都市の町並みに入ると、目的地に近づいてきた。「この近くかな」と私が声を掛けると運転席ではカーナビなる文明の利器で迷うことも無く第一の目標地である東豊野神社の鳥居と参道の前に到着する。県北に住む仲間もまもなく合流。

参加者の一人岩井氏は神官の副業（本業）を持つ身で早速、大祓詞（おおはらえのことば）の長い祝詞（のりと）が聴こえて来る。一同礼拝する。彼の奥さんの兄さんがここの宮司で私の知っている田村宮司は既に他界されたとの事。これも何かの縁と感じる。本殿の裏には見事な陰陽石が「子宝の神」として祀られている。新興の末社としては上出来だ。

晩婚で一日でも早い子宝を望んでいる濱手氏に手を合わせるように奨める。今度は奥さんと同伴で参りますとの返事が返ってきた。彼等夫婦に子宝が恵まれますように私も手を合わす。

この神社から 5 分も走ると、目指す「主基田伝承地」に到着する。私と田村宮司とで歩いた旧道は耕運機の通る農道に変り、車道は丘の中腹に立

派な道路が建設されていて至極便利になっている。主基田は直径約 18m昔の面積表記では 3 畝＝3×30 坪で 90 坪と神社の記録に残る。約300㎡弱の広さである。周囲の田圃より数10㌢高くなっていて周りの悪水が流れ込まないようにサイホン式の給水設備が施してあるのだろうか、目視では判らない。傍を流れる矢野川の水位も相当の落差があった。この川には多くのウグイ＝ハヤの群れが目に映る。

参加者一同記念写真

円形で一段高い約 3 畝の主基田

一旦は戦後私有地になっていたが、最近は有志の皆さんによって保護され地元の小学生が田植えや収穫祭を行って「村おこし」になっている。特に秋の「案山子まつり」は約50体の美の祭典として、マスコミに毎年登場する。もう一度その頃に探訪してみたいものだ。この近くには吉川八幡宮を始めとする、国の重要文化財や無形文化財の祭りなどが多く残っている。吉備中央町の地図入りパンフは旅心を誘う。野崎先達の案内でその他の隠れた見所を散策して帰路に付いた。

注記

ゆりわ田＝ご飯を竈から出して保管するお櫃（おひつ）の竹の輪を「ゆりわ」と、この地方では、その昔は称していたようです。

主基田伝承地の碑文＝『平安時代より天皇が即位された時に行われる、大嘗祭に献上する米を栽培した田（主基田）と昔から言い伝えられています。この田は円形で周囲の水田より数10㌢程高い位置にあり、矢野川からきれいな用水が直接給水されており、伝承地として地域内外に知られています。昭和56年頃、周辺の水田の圃場整備事業が施工されましたが、地元有志の強い要望により昔のままの形で保存されま した。平成 2 年の今上天皇の礼にはこの水田から収穫した米が献上されました。』

参考までに碑文を転載させて頂きました。吉備国にはこの他に

○総社市新本の国司神社（赤米を神饌する儀式）

○倉敷市玉島長尾。倉敷市玉島富田などが伝わっていますが吉備中央町の主基田が一般に知られています。

所在地＝加賀郡吉備中央町豊野 4118 番地

5. 勢神宮の式年遷宮を考える

今年(2013)は出雲大社と伊勢神宮で大きな遷宮の行事が重なった。歴史に関心のある者の一人として、一般的なことは歳(とし)相応にそれなりに判っている積もりである。特に伊勢神宮の式年遷宮が 10 月 2 日の深夜に執り行われ、ニュースになった。この期に「遷宮」の持つ意味合いの内「神の再生」の持つ側面を考えて見たい。

一般に文化財価値は「古いものが古いまま」に維持、保存されえていることに、重きを成していて、塗り物よりも素木の方が馴染み易い。

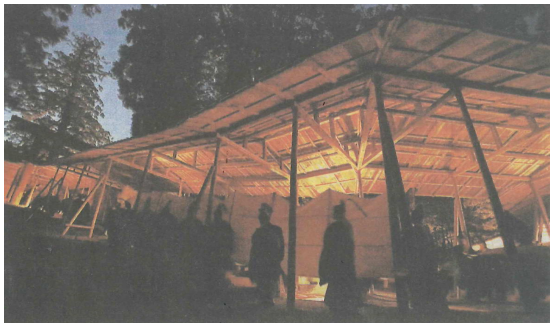
ピカピカの沖田神社拝殿

ピカピカの拝殿に造り変えた私の住む沖田神社(平成 23 年 9 月竣工)に全国歴史研究会の岡山大会で仲間を大型バスで案内した。「これはなんじゃ」との悪評を耳に接し、「400 年昔の岡山藩の 2000 町歩に及ぶ干拓地で、農業文化遺産として世界に発信しようとして居ります」と、訪問の主旨を説明し、参拝は程々に、次の目的地に移った思い出がある。概して神社仏閣は古いものの方に尊厳を感じる日本人(私も含めて)が多い。

唯一の例外は二十年毎に行われる伊勢神宮の遷宮である。他の神社仏閣は、必要に応じて或いは定期的に点検し、維持管理の視点で「解体修理」が行われ、あくまで修理の範疇である。伊勢神宮の場合には、他の神社と違い修理ではなく、新造した建物に、関連の装束(帳=とばり)、神宝(武具・楽器)なども 714 種 1576 点に及ぶものが、全て新調される。使える建築資材は、他の神社で修復に活用されるので無駄にはならない。

本来は国家的大事業であったが、今は伊勢神宮の宗教法人が主催する。天皇家の準公式行事ではあるが、天皇は当日皇居で伊勢神宮に向けて拝礼され、長女の黒田清子さんが池田厚子斎宮の代理として臨時の祭主を勤められたと報じられた。約 570 億円の浄財が投じられたが、我々の税からの負担ではない。あくまで国民からの浄財である。

長い歴史の中で仕組まれた「しきたり」の中で粛々と今回の遷宮も、8 年間に亘り続けられた祭事のクライマックスが、平成 25 年 10 月 2 日の深夜のことであった。(下図参照)



朝日新聞が報じた、絹垣に覆い隠された神体の遷宮

10 月 2 日深夜の内宮の遷宮歌人の佐佐木幸綱氏は、外宮の特別奉拝者として参席し、その厳かな祭事を目の当たりして古い神殿から、新しい神殿に神が遷り行く瞬時に「日本人として『新』とは何か」を考えたと述べている。

旧から新に神が遷る新(あたら)しいは、その元は「あらたし=改たし」のヤマト言葉があった。大伴家持の万葉集の歌を例に上げて、説明している。「あたらし」は「あらためる」の意味を昔から持っていた。20 年に一度改めることが「あらたし=新しい」ことになるのは平安時代に定着したそうで、明治になると「進んでいる」の意味あいが加わって今日がある。ご神体が新旧の御垣を遷って行く様子を、直接に拝して考えたと、流石に歌人だけに含蓄のある表現だ。万葉の時代から今日まで、多少の意味合いを変えつつ繋がっている「ことば」が伊勢神宮の遷宮に重なっている事実を学んだ。

私はその他に、もっと違った一面をこの遷宮は